母子家庭の子どもたちと、別れて暮らす父親との関わりに関する研究

The relation between the children of divorce and their father

プロジェクト代表者　堀田香織（教育学部・教授）
Hotta　Kaori（Education・professor）

１　研究の目的

本研究の目的は母子家庭の子どもと、離婚後別れて暮らす父親との関係が、子どもの心理的発達に及ぼす影響を、子どもの発達段階、性別、父親の関係の質、子どもの抱いている父親像の変遷、父親の抱いている子ども像の変遷、父親と子どもの関係に関する母親の認識といった重層的な側面から調査研究し、今後の母子家庭のサポートの一助とすることにある。

本年度は学童期・思春期の子どもを養育する母子家庭の追跡調査、および親の離婚を体験した青年のインタビューを行い、母子家庭と、別れて暮らす父親の関わりをどのような視点で分析するかを考案し、さらに、母子家庭と、別れて暮らす父親の家族システムに関する仮説的な家族モデルを生成した。

２　研究の方法と分析

＜小中学生を養育する母子家庭の参与観察とインタビュー＞

小学生・中学生を養育している母子家庭１０組の母親に対するインタビューと参与的観察、大学生の派遣（家庭教師兼話し相手）とスーパービジョンを引き続き行い、子どもの発達段階による母子の成長と変化を追った。

特に学童期後期から思春期にかけて母子が遭遇する前思春期および思春期の問題に焦点をあて、そこにどのように父親が介在するか、また父親が関わっていない場合は、関わっていないという事実がどのように思春期の問題に介在するかを質的研究の手法をとって分析を行った。

＜親の離婚を経験した青年のインタビュー＞

幼児期から中学時代までに親の離婚を経験した青年のインタビューを行った。離婚前から現在に至るまでの経過、親の離婚の評価や自分の人生への影響、自分の結婚観などを半構造化面接によって聴取したものである。

特に両親の離婚後、父親とどのような関わりがあったか、どのように感じ、考えていたか、あるいは父親の関わりがないことに対してどのように認識していたかといった事柄を中心に、ナラティブ・アプローチによって分析を行った。

３　結果と考察

（１）母子家庭の子どもたちと、別れて暮らす父親との関わりを分析する視点の抽出

母子家庭には多様な母子家庭が存在し、さらに父親との関わりのあり方も多様なものがある。まず第1に分析の視点を抽出した。以下がその項目である。

「父親との関わりが継続しているか否か」「それを子ども、父親、母親がどのように望んでいるか」「父親の関わりの頻度・種類・期間」「子どもの中の父親像」「母親が父親に対して抱く父親イメージ」「離婚後の両親の子育て協力体制」「離婚後の父親の生活状況と子どもへの思い」

（２）母子家庭の子どもたちと、別れて暮らす父親との家族システムモデルの仮説生成

抽出した視点を元に分析を行った結果、母子家庭と別れて暮らす父親との家族システムモデルに関して、いくつかの異なるモデルが生成された。

①父親の関わりが継続されていない母子家庭の家族システム

従来の研究では、母子家庭は父親不在の家庭と考えられることが多い。特に離婚後父親の関わりのない家庭においてはそのように考えられてきた。しかし離婚後、父親の関わりのない母子家庭においてさえ、父親が残した父親イメージが母子家庭の家族システムに大きく影響を与える場合があることが見出された。

a. 母子の希望に反して、父親との関わりがない場合、母子家庭の家族システムの中に、自分たちを見捨てた父親像が残り続け、喪失感を残し、葛藤を生み続ける。それに対して母親の希望で、もしくは子どもの自己選択で父親との関わりに終止符を打った場合には、母子の新たな家族システムが早期に構築される。

b. 特に幼児や学童低学年の子どもは、母親がもつ父親のイメージを自分の中に取り込み、自分の「物語」として語る。従って、母親がネガティブな父親イメージを持つ場合、子ども自身は父親から被害を受けていなくとも、父親のネガティブなイメージを自分のものとして持ち続ける。それに対して、母親がポジティブな父親イメージを意識的に子どもに伝えている場合は、子どもの中にポジティブな父親像が残っている。

c. 両親の離婚後、一時期父親との関わりが途絶え、しかし子どもが成人してから、父親とのあらたな関係が展開した場合、母親が抱いていたネガティブな父親像が修正され、自らの視点で父親を見直す体験が生じる場合がある。

②父親との関わりが継続している場合の家族システム

a. 特に学童期高学年あるいは中学生（思春期）の場合（本研究では女子の事例に見られた）、たまに面会する父親を理想化し、現実に暮らしをともにする母親にネガティブなイメージを投影する場合がある。両親が同居する場合には、両親のそれぞれが理想的な部分とそうではない部分を受け持つ場合が多いが、母子家庭においては反抗の対象となる権威がすべて母親に帰属され、反対に父親は良き聴き手、あるいは母親を共通の敵に回しての同盟を組むというような現象が見られ、母親に多くのストレスを生み、同時に子どもが反抗期の乗り越えるのを難しくしている。

b. 小学校卒業まで、あるいは中学途中まで父親との関わりを定期的に継続する場合が多く、その後子どもが心理的に独立するにつれて、仲間との関係へと移行し、父親との関係を自ら減じていくことが多い。このプロセスにおいて、子ども自身が自ら決定して父親から距離を置く場合、その移行はなめらかに進む。しかし、子どもの希望に反して父親の関わりが途絶えるような場合、子どもにとって、二度目の大きな喪失体験となる。そのような時には離婚直後の混乱が再び生じる可能性がある。

本年度は少ない例数の中から異なるいくつかの仮説的モデルを生成した。これらのモデルは、離婚後の母子家庭を考えていく際に、父親の存在を無視して考えることはできないことを明らかにしている。また父親と子どもとの関係だけではなく、母親も含めた家族システムを見つめていくことの重要さも浮き彫りにされた。今後より多くの事例から異なるモデルを生成し、精緻化していくことが課題である。